

## 博士論文要約

立命館大学大学院先端総合学術研究科

先端総合学術専攻一貫制博士課程

イトウ カスミ

伊東 香純

### 「精神障害者のグローバルな草の根運動——連帯の中の多様性」

- 第 1 章 はじめに
- 第 2 章 世界組織の発足
- 第 3 章 欧州の組織の発足
- 第 4 章 組織の名称をめぐる議論
- 第 5 章 精神医療のユーザー、サバイバーは精神障害者か
- 第 6 章 東欧地域における ENUSP の活動
- 第 7 章 対立したままでの連帯
- 第 8 章 アジア、アフリカ、中南米地域からの参加
- 第 9 章 総合考察と結論

本研究の目的は、精神障害者がなぜ、また、どのようにグローバルな規模で連帯し、世界組織として活動してきたのかを明らかにすることである。

精神障害に関する歴史記述の多くは、障害を治療したり管理したりする近代精神医療の専門職や家族の実践及びその基盤をなす考え方の「進歩」の経緯の論述である。第 1 章では、近代精神医療の専門職の歴史として具体的に、精神医療の専門職の歴史、近代精神医療に批判的な実践についての研究、医療人類学分野の研究をレビューした。その結果、精神障害に関する歴史記述において、たとえ進歩史観に批判的な場合でも、精神障害をもつ本人は、精神医療福祉の受動的な対象として扱われてきたことがわかった。さらに、近代精神医療に批判的な実践についての研究の中には、精神障害者の活動を主要な検討対象としているものもあるが、その活動は、症状のコントロールに役立ったり居場所となったりするなど、個人が社会に適応するために有用な実践として扱われていた。

しかし、実際には精神障害者は、社会の変革を求めて世界のさまざまな地域で社会運動をおこなってきた。これまでの歴史記述には、精神障害者の主張や活動の歴史を検討の対象としてこなかったため、一面的で偏ったものであるという問題がある。

障害者を介入の対象として扱う精神医学や社会福祉学分野の研究に対して、障害者の社会運動の研究に力を注いできたのが、障害学の研究である。障害学は、従来の歴史が非障害者の視点からの歴史であることを明らかにすることを目標の 1 つとする分野であり、本

研究もこのような問題意識を共有している。しかし、障害学においては、身体障害者の運動が主要な検討の対象であり、精神障害者の運動の歴史の研究は未だ僅かである。

精神障害者の運動に関する僅かな先行研究は、英国と米国の運動を主な対象として、その運動の精神医療体制に対する主張やアイデンティティの政治を分析してきた。こうした精神医療サービス体制の存在を前提とした精神障害者の運動の説明では、一部の地域の運動の一面しか捉えられていない。英米以外の地域については、オランダ、ドイツ、日本等の運動における重要な出来事についての研究があるものの、通史が描かれるには至っていない。これらのそれぞれの地域を対象とした研究では、その地域の社会的、政治的、文化的状況を前提として運動が分析されており、運動のトランスナショナルな側面はほとんど言及されてこなかった。これまでなされてきた世界規模、大陸規模の運動に関する記述は、そのほとんどが運動の担い手によるものであり、運動の主張の正当性を説明することを主要な目的としていたり、断片的な記述に留まっていたりした。しかし、マッドスタディーズなど、狂気の人々の歴史を記述する動きが近年、高まってきている。

さらに、これらの研究の他に、グローバルな規模の社会運動に関する研究と消費者主義の運動の研究を先行研究としてレビューした。その結果、精神障害者の運動は、これらの運動とは異なる特徴を持っており、これらの研究では精神障害者の運動を説明できないと考えた。

そこで本研究では、精神障害者のグローバルな運動の現代史を記述することにした。主な研究対象は、世界精神医療ユーザー・サバイバーネットワーク (**World Network of Users and Survivors of Psychiatry: WNUSP**) である。WNUSP は、1991 年に発足した、精神医療のユーザー、サバイバーの個人及び組織による世界組織である。精神医療のユーザー、サバイバーとは、自身を「狂気及び／あるいは精神保健の問題を経験している、及び／あるいは精神医療サービスを利用しているあるいはそこから生還した」と自己認識する人のことを指している。WNUSP を主な研究対象とする理由は、WNUSP が世界の広い地域で活発な活動を続けている組織だからである。WNUSP の他にも精神障害者の世界組織を名乗っている団体はあるが、西洋の一部の地域にしか会員がいなかったり、メーリングリストやウェブサイトを通じて情報を発信する活動が主であり会員同士の相互交流がほとんどなかったりする組織が大半を占めている。これに対して WNUSP は、2004 年時点で世界 50 か国以上に会員がおり、数年に一度総会を開催したり障害者権利条約起草の作業部会に参加したりといった活動を展開してきた。また、WNUSP と同じく 1991 年に発足した精神医療のユーザー、サバイバーの個人及び組織による欧州規模の組織である欧州精神医療 (元) ユーザー・サバイバーネットワーク (**European Network of (Ex-) Users and Survivors of Psychiatry: ENUSP**) の活動も検討の対象とする。

本研究の歴史記述のために使用した史料は、精神障害者の運動の歴史を記述するための一次史料と、情報を補完するための二次史料の大きく 2 つに分けられる。一次史料には、運動に携わった組織や個人によるニュースレターや会議の記録、文通などの文献史料と、

インタビューによる口述史料が当てはまる。他方、二次史料には、新聞記事や医療者などによる記録やホームページ、学術論文などが当てはまる。本研究では、欧州などで活動する14人の活動家と1つの組織にインタビュー調査を実施した。インタビューはすべて英語でおこなった。インタビューの主な活動地域は、ドイツが3名、オランダ、英国、デンマークがそれぞれ2名、ニュージーランド、スウェーデン、フランス、ジョージアがそれぞれ1名、スペインの個人が1名と組織が1つである。

第2章では、1991年に精神障害者の世界組織であるWFPUが発足するまでの歴史を記述した。19世紀後半、米国では精神病院における虐待に反対するキャンペーンがおこった。これは徐々に精神科医を中心とした国際会議に拡大していき、第二次世界大戦を挟んで1948年、精神医療専門職や精神障害者、家族などの合同の組織であるWFMHが結成された。1970年代後半、ソ連などにおける精神医学の政治的な「乱用」に対する国際的な懸念が高まっていった。アメリカ精神医学会等からの要請を受けて1980年、国連人権委員会は、「乱用」防止のため精神医療における非自発的な介入等についての原則の策定を開始した。この策定をリードした組織の1つが、WFMHであった。米国では、公民権運動や反精神医学の運動の影響を受けて、1960年代から精神障害者による運動が活発になっていき、1970年代、精神障害者だけで活動することの重要性を明確に打ち出すようになった。その後、1970年代後半には精神保健の分野でも行政や医療福祉の専門職が、精神障害のある本人の参加の重要性を認識するようになり、この頃から精神障害者の運動の中では、自助活動をおこなう精神医療の消費者としての運動が前景化していった。同時期、米国に事務局をおくWFMHは、精神障害者の世界組織の発足を準備し始めた。そして1991年にメキシコシティで開催されたWFMHの世界大会の場で、WFPUが結成された。結成時の話し合いでは、「合理的」で効率的な方法による会議運営や精神医療の消費者としての運動を主張した米国の参加者に対して、ニュージーランドやメキシコの参加者から反論があった。結果としてWFPUは、形式にとらわれない混沌とした中で議論を進め、精神医療は廃絶すべきという主張をしうる組織として発足した。このような経緯からWFPUは、準備の過程においては米国の精神科医などがリードしていたが、彼らの意図とは異なる組織として発足したことを明らかにした。

第3章では、1991年に精神障害者の欧州のネットワークが発足するまでの歴史を記述した。まず、欧州各地の運動の状況を概観した。その結果、いくつかの地域では精神障害者だけの組織ができるまで、精神医療専門職などとの合同の組織において精神障害者が抑圧を感じてきたことや、現在でも精神障害者だけの組織が国内にない地域があることがわかった。続いて、欧州規模の運動について、第1回総会まで各地の運動のトランスナショナルな側面を記述した。その結果、重要な出会いの場所の一つは、イタリアにおける精神医療開放運動に関連するネットワークであったことがわかった。イタリアのトリエステでは、1970年代から比較的急進的な精神医療改革が実施され、世界的に有名になった。そして、多くの見学者が現地を訪れたり、関係するシンポジウム等を開催したりした。それをきつ

かけとして、1974年には情報共有のための欧州規模のネットワークが結成された。このネットワークは、精神医療の専門職が中心ではあったものの、国境を越えた精神障害者の重要な出会いの場となっていた。そのような経緯で、第1回総会では参加者の主張が重要な論点で異なっていることが明確になったものの、情報共有を目的とした緩やかなネットワークとして欧州のネットワークは発足した。この理由は、医療者との合同の組織の中で抑圧を感じてきた活動家にとって、欧州規模の精神障害者のネットワークは魅力的な活動の場所であったからだと考えた。ただし、発足当初、ネットワークの活動をリードしていた地域は、西欧、中欧、北欧に偏っていた。

第4章では、欧州の組織と世界組織が、1997年に組織の名称を変更するまでの歴史を記述した。欧州の組織も世界組織も、発足当初の名称には（元）ユーザーという呼称のみが含まれていた。この名称に対して出された批判は、異なる主張を持つ人々が同じ呼称を使うことはできないというものであった。欧州の組織では、1994年の第2回総会で組織の名称に関する議論が紛糾し、それを受けて、同年、意思決定はせず、アイデンティティや問題意識についてお互いの理解を深めるためのセミナーを開催した。このような議論は、主張の違いによって組織が分裂してしまうことは防ぐべきであるという共通した了解のもとに進んでいった。その理由は、一方ではより規模の大きな組織になることによって発言や資金獲得の機会を得やすくすることであった。特に欧州の組織は、当初は緩やかなネットワークとして発足したが、その後急速に欧州議会などでの発言権を求めて行動するようになっていった。他方では、主張以外の共通点を見出そうとする議論があった。他人によって自分のことを定義される経験はもうしたくないという意見が出されたり、精神医療の概念を使わずに自分たちを定義する方策が検討されたりした。そのような議論の結果、両組織は、WNUSP、ENUSPと（元）ユーザー、サバイバー両方の呼称の含まれた名称に変更し、異なる主張を持った人が1つの組織にいることを明示した。このような過程から本章では、両組織の連帯の基盤が主張の同一性や類似性ではないことを明らかにした。

第5章では、ENUSPにおける欧州障害フォーラム加盟を巡る議論を記述した。欧州委員会は、1989年から障害者のNGOに資金援助をするヘリオスプロジェクトを開始し、ENUSPもその資金を主要な財源の1つとして活動してきた。ヘリオスプロジェクトは1996年末に終わる予定で、プロジェクトの最後の数年間の資金のうちの一部は、障害者の組織が連合した欧州障害フォーラムの結成のために使われ、1997年以降は欧州障害フォーラムが欧州委員会との資金等の交渉の窓口になることになっていた。このためENUSPが、1997年以降も欧州委員会から資金援助を得るためには、欧州障害フォーラムに加盟する必要があった。フォーラムから精神障害者の組織としての加盟を打診されたENUSP内部では、ユーザー、サバイバーは障害者であるかという議論が巻き起こった。しかし、議論に決着のつかないままENUSPは、活動資金が途切れないよう欧州障害フォーラムへの加盟を決めた。また、同時期には、医療専門職が主導し医療者の潤沢な資金によって運営されているけれど、ユーザー、サバイバーもメンバーに入っている欧州規模の組織が複数結成され

ており、それらの組織は精神障害者の代表としての欧州障害フォーラムへの加盟を希望していた。そのような競合する組織の存在も ENUSP のフォーラム加盟を後押ししたと考えられる。このような経緯から、資金に関する制度の変更により、ユーザー、サバイバーのネットワークは、障害者運動として活動するか否かについて、組織としての決定をせざるを得なくなったことを明らかにした。

第 6 章では、ENUSP が東欧地域との連帯をどのように実現していったのかを分析した。第 3 章では、ENUSP の発足を主導したのは西欧、北欧、中欧の精神障害者であり、第 1 回総会では東欧の精神障害者の参加を促進することが今後の課題とされていたことを述べた。これを受けて本章では、東欧地域に注目した。ソ連の影響を強く受けていた東欧でも、精神医療の政治的な「乱用」が問題視されており、欧州のいくつかの NGO がこの問題に取り組んでいた。そのような NGO の 1 つが、英国に拠点を置くハムレットトラストである。ENUSP は、ハムレットトラストが主催する東欧の精神医療専門職や精神障害者を対象としたトレーニングに講師として呼ばれたり、東欧で活動を始めるための情報パックに意見を求められたりした。そして、そのような機会を利用して東欧の精神障害者と出会ったり、東欧からの ENUSP の総会への参加者の渡航費をハムレットトラストに援助してもらったりしていた。このように ENUSP はハムレットトラストと多方面で協力してきた。しかし本章では、ENUSP は、ハムレットトラストとは異なる立場から東欧との連帯を図ってきたことを指摘した。ENUSP では、東欧における近代的な精神医療が普及していない状況が肯定的に説明されたり、東欧に精神医療体制が広がっていくのを防ぐことの重要性が強調されたりしていた。つまり、ENUSP にとっての東欧との交流の動機は、精神医療の「乱用」の批判には重点はなく、それよりも個人同士や国内の団体どうしの個別のつながりを通して生まれた仲間としての意識にあったと考えた。

第 7 章では、WNUSP が WFMH から独立して総会を開催するようになり、組織の規約を採択するまでの過程を記述した。WNUSP が、NGO として登録するために組織規約の策定を始めた 1990 年代後半、WNUSP の中には同じ国から複数の組織がメンバーになっている場合があり、その内いくつかは国内の組織どうしの折り合いがよくないことが知られていた。このような状況で WNUSP の正会員を、各国 1 つずつの組織に絞ったり各国部会を設けたりした場合には、意見を言えなくなってしまうたり WNUSP を抜けざるを得なくなってしまうたりする組織が発生することが予想されていた。そこで WNUSP は、1 カ国から複数の全国組織が正会員になれるという規約を設けた。これにより国内で意見のすり合わせが難しい場合でも、意見が対立したままで世界組織として連帯できるようにしたことを明らかにした。さらに、正会員を全国組織に限り、全国組織が発足していない場合には地方組織を正会員として認めることにより、精神障害者の運動が活発で多くの組織のある特定の地域の意見が WNUSP の中で支配的にならないような工夫もなされていた。

第 8 章では、WNUSP においてアジア、アフリカ、中南米からの総会参加者が急増する過程を記述した。WNUSP は、資金難のため、1999 年まで WFMH の世界大会と同会場で

総会を開催してきた。このため、自国の医療者から WFMH の世界大会に参加するための渡航費の支援を得られないメンバーは、WNUSP の総会に参加する手段を得にくい状況だった。アジア、アフリカ、中南米からの参加者が急増した 2004 年の総会は、初めて WFMH の世界大会とまったく別の日程と会場で、デンマーク政府の資金援助を受けて開催された。このため費用の使い方を自分たちで決めることができ、これまで渡航費を得るのが難しかった地域に優先的に渡航の経済援助ができるようになった。また、1990 年代後半から始まった国連障害者権利条約の策定に当たっては、ニューヨークでの特別委員会はもちろん、各地で多くの学習会や戦略会議が開催され多様な種別の多くの障害者が参加した。国連のイベントでは、国連が経済的に困難な状況にある地域の障害者に優先的に渡航費を支援していた。このように条約策定は、参加の機会が医療者との関係によって左右されにくい場であり、障害者の交流が大幅に促進されるきっかけとなった。このネットワークが WNUSP にとってアジア、アフリカ、中南米のメンバーに出会う重要な場であったことがわかった。このような経緯から WNUSP が、WFMH よりも障害者運動での活動をより活発化していたことが、これらの地域からの参加を促進したことを明らかにした。

第 9 章では、各章で明らかになったことをまとめた上で、精神障害者のグローバルな連帯及び欧州規模の草の根運動における 2004 年の総会までの活動は、思っていること、言っていること、体験していることが周囲の人々にまともにとりあげられない経験という連帯の基盤を見出していく過程であったと考えた。WNUSP は、異なる主張をもった人の組織であることを明示するために組織の名称を変更したり、1 カ国から複数の全国組織が正会員になれるような規約を設けて国内で対立したままで世界組織として連帯できるようにしたりして、多様な主張を持った人の組織となれるよう工夫を重ねてきた。また、資金の使い方によって、多様な経済状況の人が参加できる活動の仕方を模索してきた。しかし、誰でも可能な限り多くの人々の参加を求めてきたわけではなく、メンバーをユーザー、サバイバーに限定し、その立場での活動を重視してきた。WNUSP は、精神医療は廃絶すべきであるという主張をいう組織として発足し、徐々に WFMH から離れて障害者運動の一員としての活動を強化していった。WNUSP や ENUSP が、障害者運動と共有したのは、障害者のための組織ではなく、障害者の組織であるという点だった。つまり、連帯する外部の組織の選択においても、抑圧されてきた本人という立場を重視したといえる。そこで、WNUSP が多様な主張や呼称を受容しようとしたのは、他人によって自分の状態を決めつけられたり、意思決定を否定されたりした経験を踏まえて、WNUSP の中ではそのようなことが起きないようにしようとしたのだと考えた。以上のことから、自分の考えや体験が考慮に値するものとして取り上げられてこなかったという経験は、その形式や根拠は異なっていたとしても、世界的に共通しており、これが世界組織の連帯の基盤として見出されたと考えた。

本研究の研究史上の意義は、次の 3 点にまとめられる。第一に、英国と米国に対象が偏っていた精神障害者の社会運動の先行研究に対して、本研究は、世界規模、欧州規模の連

動の現代史を記述した。その結果、自らの考えや体験を否定されてきた経験という、世界規模で共有される精神障害者の運動の連帯の基盤を明らかにすることができた。これまで特定の政治的、社会的、文化的状況を前提として分析されてきた精神障害者の運動のトランスナショナルな活動の側面を指摘した。

第二に、組織の名称や構造に注目して、その独自性を指摘した点に本研究の意義がある。先行研究は、精神医療体制に対する主張を主要な分析対象として、精神医療の非自発的介入や薬物療法などに対する主張の同一性や類似性に基づいて、医療者との連帯や精神障害者どうしの対立を説明してきた。これに対して本研究は、ユーザー、サバイバーという立場を基盤に連帯し、多様な主張を受容できるよう組織の運営の仕方にさまざまな工夫をするという運動のもち方を明らかにした。WNUSP の組織の構造には、他のグローバルな組織とは異なる特徴があり、これは考えや体験を否定されてきたという精神障害者の経験に基づいて作りだされた工夫であると指摘した。

第三に、身体障害者の運動を主要な検討対象としてきた障害学に対して、本研究では精神障害者の運動に焦点を当てた。その結果、ENUSP では障害者運動の一員になるべきか否かについて白熱した議論があったことや、WNUSP は WFMH から離れて障害者運動との連帯を強めたことによりアジア、アフリカ、中南米地域のメンバーが参加しやすくなったことなど、他の種別の障害とは異なる運動の特徴を指摘した。

つづいて今後の課題について、大きく 3 つ提示した。まず、人間関係の不足、時間的制約、金銭的制約、言語的制約などにより、本研究のインタビューは西欧の活動家に偏っている。このため東欧やアジア、アフリカ、中南米のメンバーは受動的に運動に動員されたかのような記述になってしまっている。これらの地域の視点から、WNUSP の活動を分析することが 1 つ目の重要な課題である。次に、障害学の主要な理論である障害の社会モデルの発展に貢献するためには、運動の主張の検討が有効といえる。精神障害者の運動の主張が医療者や家族などの運動と比較して独自であることは、いくつかの地域の先行研究において既に指摘されている。本研究では WNUSP 内部の主張の多様性を強調してきたが、2 つ目の課題として今後は WNUSP の組織としての主張にも分析の対象を拡大したいと考えている。これにより障害学分野へのさらなる理論的な貢献が期待できる。3 つ目に、本研究は WNUSP と精神医療の専門職や障害者の運動との関係に注目してきたが、それらの運動以外にも関係を検討することにより WNUSP の特徴をより明確にできる運動が挙げられる。具体的には、マッドプライドと家族の運動である。マッドプライドは、狂気を誇りにする祭典であり、組織化されておらず誰でも参加できる運動である。1990 年代から英国やカナダを中心に展開されている。また、精神医学に批判的な視点から狂気について検討するマッドスタディーズの研究者とも密接に関係している。家族の運動との関係については、今後、アジア、アフリカ、中南米地域に研究を進めていく上で、いっそう重要度が増す論点であると考えられる。

[主要参考文献]

- Crossley, Nick, 2006, *Contesting Psychiatry: Social Movement in Mental Health*, Oxon: Routledge.
- Driedger, Diane, 1988, *The Last Civil Rights Movement*, Hurst & Company, St.Martin's Press. (=2000, 長瀬修 (訳), 『国際的障害者運動の誕生——障害者インターナショナル・DPI』エンパワメント研究所.)
- Lefrançois, Brenda A., Robert Menzies, and Geoffrey Reaume eds., 2013, *Mad Matters: A Critical Reader in Canadian Mad Studies*, Canadian Scholars Press.
- Morrison, Linda J., 2005, *Talking Back to Psychiatry: The Psychiatric Consumer/Survivor/ Ex-Patient Movement*, New York and Oxon: Routledge.
- O'Hagan, Mary, 2014, *Madness Made Me*, Wellington: Open Box.
- Porter, Roy, 2002, *Madness: A Brief History*, Oxford University Press. (=2006, 田中裕介・鈴木瑞実・内藤あかね (訳) 『一冊でわかる狂気』岩波書店.)
- Scull, Andrew, 2016, *Madness in Civilization*, Thames & Hudson. (=2019, 三谷武司 (訳) 『狂気——文明の中の系譜』東洋書林.)